

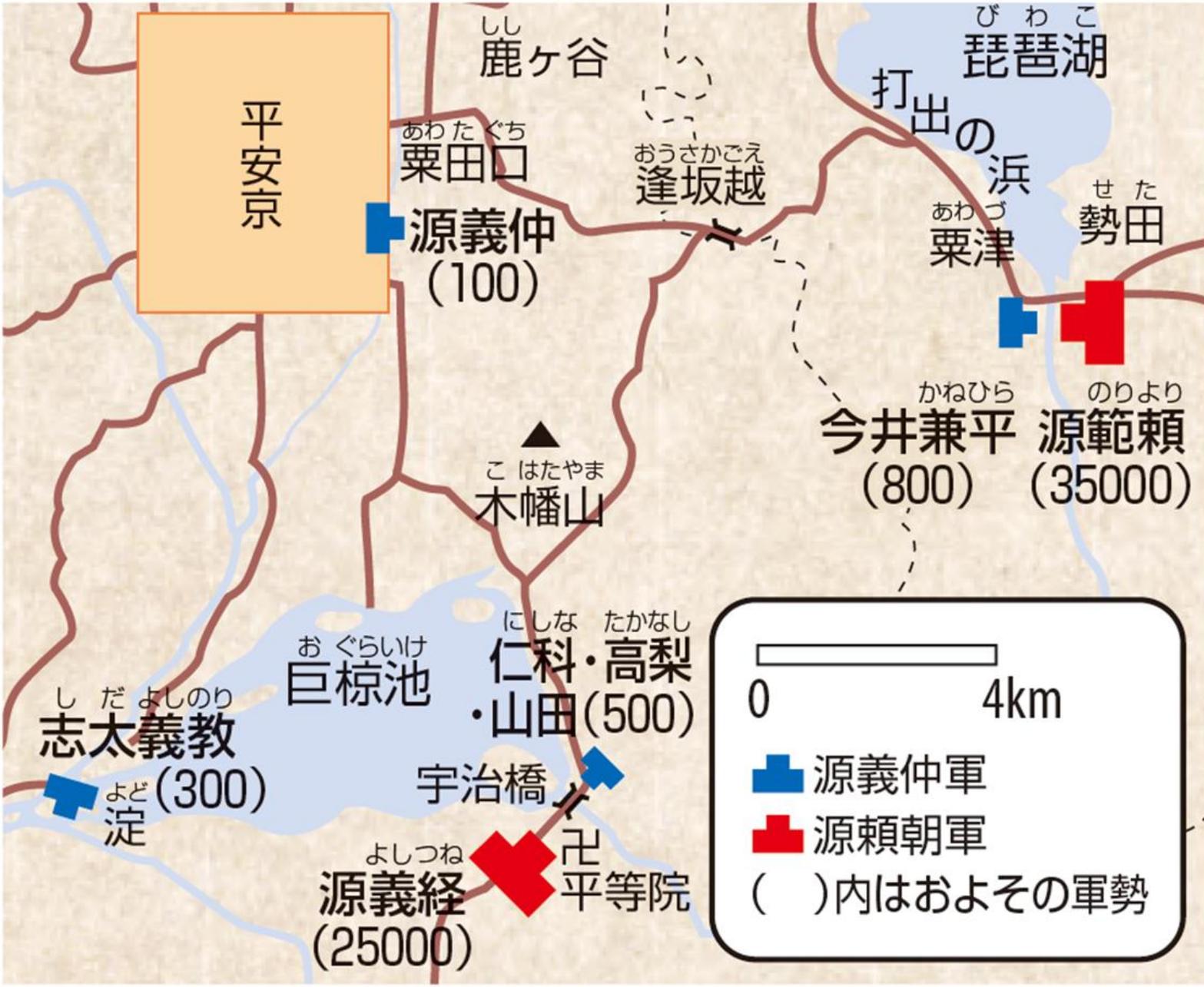
# 木曾の最期

導入

瀬田川、宇治川の両方の戦いで敗北し、木曾義仲は京都を離れ逃げ出す。

東：範頼      南：義経      西：平家

三方を敵に囲まれ、残る逃げ道は北にしかない。だが義仲は、栗田口から東に向けて走り出す。同じころ、今井兼平も戦に敗れ、わずかな兵とともに京への道を走っており、二人は打出の浜で合流した。



出典：教科書「新編 言語文化」(数研出版)

「兼平よ、幼少竹馬の昔より、死なば一所と誓いあつたお前との仲。まだ絶えてはいなかつたのだ。さあ、その旗を揚げよ！」

兼平が巻いて持っていた旗を揚げると、わらわらと木曾方の武者たちが集まってきました。その数三百。

「これだけの人数がいれば、どうして最後の戦をせずに行われよう。兼平、ここに密集しているのは誰の手か」

「甲斐の一条次郎殿と聞いています」

「勢はいかほどか」

「六千余騎と思われます」

「うむ。ならばよい敵であるぞ。同じ死ぬならば、よい敵と戦つて、大勢の中で討ち死にすべし」

義仲は自ら先頭に立つて、真っ先に駆けていきます。

原文

あぶみ  
燈ふんばり立ちあがり、

だいおんじゃう

大音声をあげて名のりけるは、

くわんじや

「昔は聞きけん物を、木曾の冠者、

さまのかみ けん いよのかみ

今は見るらん、左馬頭兼伊予守

朝日の將軍、源義仲ぞや。

いさじみづのじんじう

甲斐の一条次郎とこそ聞け。

たがひによいかたきぞ。

ひやうごのすけ (源頼朝)

義仲討って兵衛佐に見せよや」

とて、をめてかく。

一条次郎、

「今名乗ったのは大將軍だ。討ち漏らすな！」

フーーツと敵が襲い掛かります。

義仲率いる三百騎は、一条次郎率いる六千騎の中  
にかけ入り、縦に、横に、蜘蛛手に、十文字に  
かけわって、後ろにつつと走り出ると、  
五十騎ばかりになっていました。

どう ちねん

そこへ土肥実平率いる二千騎が立ちふさがります。

それをも打ち破って行くほどに、あそこでは  
四、五百騎、ここでは二、三百騎、  
百四、五十騎、百騎とぶつかります

それを馬で突撃し、打ち破り打ち破り押し通ると、  
わずかに主従五騎になっていました。

その中に巴の姿もありました。義仲は巴に言います。

「お前は女であるので、さつさとどこへでも行ってしまえ。俺は討ち死にしようと思う。もし人手にかからなければ、自害をするつもりだ。天下にきこえた木曾義仲が、最後の戦に女をつれていた、などと言われては後世の名折れである」

しかし巴はこれを拒否します。

「私は最後まで殿と……」ならぬ！行け！」

「殿！」「ええい、行けというがわからぬかッ」

（原文）

なほ落ちも行かざりけるが、あまりに言はれて

（ああ、よやそつな敵がほしいなあ）

巴「あっぱれ、よからう敵がな。」

最後の戦して見せ奉らむ。」とて、

控へたる所に、武蔵国に聞こえたる大力、

おんだのはちろうともしげ

御田八郎師重、三十騎ばかり出で来たり。

巴、その中へ駆け入り、御田八郎に押し並べて、  
むずと取って引き落とし、

ひく まちわ

わが乗ったる鞍の前輪に押し付けて、  
ちっとも働かさず、首ねぢきって捨ててンげり。

巴御前は、敵将を討った後、装具を外して馬を  
駆け、東国へと落ち延びたとされています。

わずかに残った味方も皆いなくなり、  
いよいよ木曾義仲と今井兼平の二騎だけに  
なってしまった……。

ここからが教科書本文の場面です。  
果たして二人の運命やいかに……！

# 木曾の最期

発展

**この話、どこまで本当なの？**

「主従二騎」しかない

だとしたら

一人の会話を

聞いているのは誰？

## 結論

この平家物語は、  
事実をベースに作られた、  
フィクション（虚構）の物語であ  
る

## 事実

約80種類の別バージョンの  
「平家物語」が存在する

## 活動

〇〇校バージョンの  
「平家物語」があっても良い

あなたは映画の脚本家です。

今度、『平家物語』木曾の最期』という映画を作ることになりました。

ところが、お金を出してくれるスポンサーから、

「今売り出し中の俳優、〇〇太郎を主人公にして、

格好良く使ってくれ」

と圧力をかけられてしまいました。

「配役は何でもいい。木曾義仲でも、今井兼平でも、

石田為久でもOKだ。女装しても似合うから、巴御前だって演じられるぞ。

オリジナルキャラクターとして出すのもアリだな。

多少原作とストーリーが違っただって構わないよ。

最終的な勝敗に影響が出ない範囲で、好きに書き換えちゃってよ。

見る人が面白ければ何だって良いのさ。とにかく、

〇〇〇〇が格好良く、そして面白い、

行動、セリフ、ストーリーに仕立ててくれ。頼むよ。」

◆誰を物語の主役にする？

(格好良く描くキャラクターを決めよう)

ア 木曾義仲

イ 今井兼平

ウ 石田為久

エ 巴御前

ウ その他・オリジナルキャラクター

◆主人公を決めたら

どうしたら格好良く描けるか

アイディアを練ろう！

## 追加シーン②

義仲も、先に都へ入ったとはいえ、慎んで

**頼朝の命令をお待ちになっていたなら、**

沛公（劉邦）の策略にも劣らない人物であった  
ろうに——と、惜しまれることである。

**義仲は悪事を好み、天命に従わなかった。**

そのうえ法皇を粗略に扱い、ついには叛逆にま  
で及んだ。

**積み重ねた悪行の報いが身にふりかかり、**

首は京都に送られた。

## 追加シーン②

誰がしたことか、札に書いて立ててあった。

宇治川を水づけにしてかきわたる木曾の御れうは九郎判官

宇治川を水しづきあげて駆け渡った木曾の御料（義仲）は、九郎判官

（義経）に討たれてしまった。

田畠のつくりものみなかりくひて木曾の御れうはたえはてにけり

田畑の作物をみな食い荒らしていた木曾の御料は、ついに滅びてしまった。

名にたかき木曾の御れうはこぼれにきよしなかなか犬にくれなむ

名高い木曾の御料は、こぼれ落ちたものだ。いっそ犬にでもくれてしまえ。

義仲が世に勢いのあったころは、「木曾の御料」といえば、

草木でさえなびくほどであったのに、いつの間にか

天下の戯れ歌にまでなってしまった。

はかない世の習いとはいえ、責めるべき人もいない。

これまでの振る舞いの不善・不当は、

自業自得の報いなのだから、

今さらとやかく言うまでもない。

別バージョン（延慶本）の語り手は、明らかに

木曾義仲を、  
悪者として格好悪く

描こうとしている。

では、教科書バージョン（覚一本）の語り手は、どんな意図をもって物語を描いたのか？

琵琶法師 → 歌によって、  
（お金）をもらっていた。

教科書バージョン（覚一本）の語り手（琵琶法師）は、  
聴衆が喜ぶような、  
面白く、盛り上がる物語を

描こうとしているのではないか。

それって、今回皆が  
やったことと同じじゃない？

昔の人も今の人も、  
『面白いものが見たい、聞きたい』  
という気持ちは同じ。

そして  
『面白いものを作りたい』  
という気持ちも同じ。

「平家物語」も、  
そんな多くの人々の思いによって  
成立したのかもしれない・・・。

今回作った作品が、「〇〇本」として、  
千年後の研究対象になっているかも…